14　次の文章を読んで、問１～６に答えよ。　　〈神戸大〉二〇二二年度出題

　昔、おほやけおぼして使うたまふ女の、色ゆるされたるありけり。とていますかりけるいとこなりけり。殿上にさぶらひける〔　　ａ　　〕なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女がた許されたりければ、女のある所に来て向かひをりければ、女、「いとかたはなり。身もほろび〔　　ｂ　　〕ん。①かくなせそ」と言ひければ、

　　　思ふには忍ぶることぞ負け〔　　ｃ　　〕けるふにしかへばさもあらばあれ

と言ひて、に下りたまへれば、例のこの御曹司には、人の見るをも知らでのぼりゐければ、この女、思ひわびて里へ行く。されば、何のよきことと思ひて、いき通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。つとめての見るに、はとりて、奥に投げ入れてのぼりぬ。かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになり〔　　ｄ　　〕べければ、つひにほろび〔　　ｄ　　〕べしとて、この男、「いかにせん。わがかかる心やめたまへ」と仏神にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつつ、なほわりなく恋しうのみおぼえければ、、よびて、恋せじといふの具してなむ行きける。祓へけるままに、いとどかなしきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみおぼえければ、

　　　恋せじとにせしみそぎ（Ａ）神はうけずもなりにけるかな

と言ひてなむいにける。

　この帝は顔かたちよくおはしまして、②仏の御名を御心にいれて、御声はいとたふとくて申したまふを聞きて、女はいたう（Ｂ）泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、つたなくかなしきこと、この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほどに、帝聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて、蔵にこめてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く。

　　　の刈る藻にすむ虫の我からと音をこそなかめ世をばうらみじ

と泣きをれば、この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞあはれに歌ひける。かかれば、この女は蔵にこもりながら、③それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

　　　さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひをり。男は、女し逢はねば、かくしきつつ、人の国に歩きてかく歌ふ。

　　　（Ｃ）いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ

　の御時なるべし。大御息所も染殿のなり。五条の后とも。

（『伊勢物語』より）

〔注〕　○色ゆるされたる――身分が高く、特別な色の衣装の着用を許されていること。

　　　　○大御息所――清和天皇の母である藤原明子。

　　　　○女がた許されたりければ――女官の控えるところに、出入りを許されていたこと。

　　　　○かたは――見苦しいこと。よくないこと。

　　　　○曹司――宮中にある女官の居室。

　　　　○主殿寮――宮中の調度の管理や整備を担当した役所。ここではそこに所属する役人のこと。

　　　　○この帝――清和天皇のこと。後出の「水尾」も同じ。

　　　　○しをる――する。こらしめる。

問１　傍線部①～③をわかりやすく現代語訳せよ。

問２　傍線部(A)「神はうけずもなりにけるかな」にはどのような心情が込められているか、五〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部(B)「泣きけり」について、その理由を四〇字以内で説明せよ。

◎問４　傍線部(C)の和歌の大意を述べよ。

問５　空欄ａには、『伊勢物語』の主人公とされる人物の名字が入る。適切な漢字二文字を書け。

問６　空欄ｂ～ｄには、助動詞「ぬ」が入る。それぞれ適切な活用形に直して答えよ。二箇所ある空欄ｄには、それぞれ同じものが入る。

【解答と採点基準】

問１　①＝このようにＡ会いに来てはＢいけない。

Ａ・Ｂの両方がなければ全体０。Ｂは禁止の意が必須。

　　　②＝Ａ信仰心厚くＢ仏の御名を御心に留めて

Ａがなければ減点５。Ｂがなければ全体０。

　　　③＝Ａあの男がすぐそこにいるＢようだとＣ笛の音と歌を聴いて思うＤけれども

Ａがなければ全体０。

Ａ＝５／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝１

問２　Ａ断ち切りたいという祈願を神が受け入れてくれないほど強い女への恋心をＢどうすることもできない困惑。（47字）

Ａ＝４

Ｂ＝６〔「困惑」は「ままならなさ」や「無念さ」でも可。〕

問３　Ａ立派な帝ではなく、Ｂ男の情に流されてしまっているＣ宿縁の悪さを嘆かわしく思ったから。（40字）

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

問４　Ａ女の所にむなしく通っては帰ってきてしまうのに、Ｂまた逢いたくなっては女の所に通わずにはいられないことよ。

Ａ＝５〔「女の所に」「むなしく」「のに（逆接）」がなければ、それぞれ減点２。〕

Ｂ＝５〔反復のニュアンス、「逢いたくなって（願望）」がなければ、それぞれ減点２。）

問５　在原

問６　ｂ＝な　　ｃ＝に　　ｄ＝ぬ

【現代語訳】

昔、帝がお心がけなさってお召し使いになっている女で、（身分が高く）特別な色の衣装の着用を許されている者がいた。大御息所としていらっしゃった方のいとこであった。殿上にお仕え申し上げていた在原姓であった男で、まだたいそう若かった者を、この女は見知っていた。男は、女官が控えるところへの出入りが許されていたので、その女のいるところにやってきては（女の）向かいに座っていたので、女が、「たいそう見苦しいことよ。身もきっと滅ぶことだろう。問１①このように会いに来てはいけない」と言ったところ、

　（あなたを）思う心には（あなたに逢うのを）我慢する心が負けてしまった。逢うことと引き換えであれば、（私の身など）どうにでもなってしまえ。

と言って、（女が）女官の居室に下っていらっしゃると、（男は）いつものようにこの御居室に、人が見ていることを知らずに上って座っていたので、この女は、思い悩んで（実家のある）里に帰る。すると、（男は）なんと好都合なことと思って、（女のもとに）行き通ったので、人は皆（それを）聞いて笑った。早朝主殿寮の役人が見ると、（男は）沓を取り上げて、奥の方に投げ入れて（殿上に）参上していた。このように見苦しくふるまい続けているうちに、自分の身が空しいものになってしまいそうで、とうとう（身も）滅びるだろうということで、この男は、「どうしたらよいか。私のこのような心を止めてください」と仏神にも申し上げたけれども、いよいよ（思いは）募るばかりに思われて、依然としてどうしようもなく恋しくばかり思われたので、陰陽師や、神巫を呼んで、恋をしまいという祓の道具を持って（河原へ）行った。祓をするにつれて、ますますいとしさが募ってきて、以前よりもいっそう恋しくばかり思われたので、

　恋をしまいと御手洗河で行ったみそぎを神はお受けにならなかったことであるなあ。

と言って帰って行った。

　この帝は容貌が美しくいらっしゃって、問１②（信仰心厚く）仏の御名を御心に留めて、御声はたいそうご立派に（読経し）申し上げなさるのを聞いて、女はたいそう泣いた。「このような（ご立派な）君にお仕え申し上げないで、宿縁が悪く悲しいことよ、この男（の情愛）に束縛されて」と言って泣いた。こうしているうちに、帝がお聞きつけになって、この男を流罪に処してしまわれたので、この女のいとこの御息所は、女を宮中から退出させて、蔵に押し込めて折檻なさったので、（女は）蔵にこもって泣く。

　海人が刈る藻にすむ虫のわれからではないが、自分から（招いた事態である）と声をあげて泣くこととしましょう。世間のことを恨むことはしまい。

と泣いていると、この男が、（流された）他国から毎晩やって来ては、笛をたいそう趣深く吹いて、声は美しくしみじみと感動的に歌ったのであった。こうであるので、この女は蔵にこもりながら、問１③（あの男が）すぐそこにいるようだと（笛の音と歌を）聴いて思うけれども、互いに顔を合わせるはずもないのであった。

　それでも（私に逢えるか）と、（あの男は）今ごろ思っているであろうことが悲しいことよ。生きているともいえない我が身（の有様）を知らないで。

と思ってじっとしている。男は、女が逢ってくれないので、このように（笛を吹いて）歩いては、（流された）他国に（帰り）歩いてこのように歌う。

　（女の所に）むなしく通っては帰ってきてしまうのに、また逢いたくなっては女の所に通わずにはいられないことよ。

　水尾（＝清和天皇）の御時（のこと）なのであろう。大御息所も染殿の后（＝藤原明子）である。（大御息所は）五条の后（＝藤原順子）とも（考えられる）。